

特集 2025 年に向けた透析室のキュアとケア

Editorial

「2025 年問題」を迎える透析医療

西 慎一*

いわゆる「団塊世代」が後期高齢者層に突入開始するのは 2024 年であり、「団塊世代」が大量に後期高齢者になる年度として「2025 年問題」が注目されている。この年度前後から社会保障費や医療費の大幅増加が予測され、医療界全体にとって危機感が募る時期である。透析医療は、すでに後期高齢者が治療対象の大半であるが、やはり「2025 年問題」に大きな関心をもたずにはいられない。この 2025 年を迎える時期には、大きな社会的構造変化も次々訪れることが予測されており、この点も透析医療の明日を予測するうえで見逃せない重要課題である。本特集では、「2025 年問題」を乗り切るため、透析医療に関わる医療者がどのように対処すべきか、キュアとケアの面から各筆者に論じてもらった。

1. 「2025 年問題」に絡む人口構造変化と透析室

超高齢社会（人口の 21 % 以上が 65 歳以上の社会、日本はすでに 25 % 以上の人口が高齢者）をすでに迎えている日本は、これからもますます高齢者が増加する。近年では 65～74 歳までを簡単に高齢者と呼ばず、准高齢者と呼ぶことも提唱されている。75 歳までは比較的健康だからである。さまざまな疾病が多くなる、あるいは悪化する 75 歳以上は後期高齢者と呼ばれるが、すでに透析患者は 75 歳以上の患者が多く、2025 年頃には透析導入患者の平均年齢がここに近づくと予測される。85 歳以上の高齢者がますます多くなる超高齢透析世界では、認知症、フレイル、感染症などの身体的問題、そして介護や通院補助など社会的問題が重く透析医療にのしかかってくる。なかには、健康状態や心理的状态が優れず、透析非導入、透析の見合わせ・中止などを検討すべき症例も増加すると予測される。

2007 年から「団塊世代」の人たちは退職年齢に達しており、やはりベテ

* 神戸大学大学院医学研究科腎臓内科/腎・血液浄化センター

表 「2025 年問題」に絡むキュアとケアの課題

おもにキュアに関わる課題	おもにケアに関わる課題	キュアとケア双方に関わる課題
- 透析非導入・中止 - 歩行障害、フレイル・サルコペニア - 低栄養・微量元素不足 - 感染症、心血管系障害	- スタッフ人材確保・人材教育 - 通院補助、薬剤管理 - 介護サポート、栄養サポート - 社会保障・年金問題	- 腎臓リハビリテーション - 栄養補助介入、フットケア - 在宅透析、PD ラスト

ラン、あるいは職場リーダー的年齢層は減少している。そして、「団塊世代」ジュニアが50代を迎えるのが2021年である。このころから、介護離職が増加することも予測されている¹⁾。つまりベテラン、職場リーダーという年齢層の働き手が職場から少しずつ減少し、若い働き手に負担がかかるようになると予測されている。透析室に勤務する医療者の家族介護の実態を職場管理者は把握しておくべきかもしれない。

2. 一人暮らし・老老介護の時代

単に高齢者が多くなるだけでなく、一人暮らしの高齢者が女性を中心として多くなるのが「2025年問題」の一つの課題である。一人暮らしの人は、孤食により栄養障害に陥りやすいことも知られている。低栄養による感染症、骨折、貧血など、さまざまな身体的異常が出現する。これらの身体的異常は透析患者では、死因あるいはADL低下に結びつく重要な問題点である。

すでに透析患者の半数は通院補助が必要といわれている。一人暮らし、老老介護では、家族からの通院サポートも期待できない。このような状況で、透析施設はどのような対応をすればよいのか、今から真剣に取り組む必要がある。日本腎臓リハビリテーション学会が立ち上がり、透析患者のADL改善策も提言されている。少しでも自立できる時間を維持してもらうキュアとケアが必要である。

3. 「2025年問題」に絡む透析医療におけるキュアとケアの課題

表にこれから迎える「2025年問題」に絡む透析医療におけるキュアとケアの課題をまとめた。透析医療をキュアとケアに明確に分けることは難しいが、およそ表に示した事柄が差し迫った課題と考える。われわれは真剣に課題に取り組み始める必要がある。

最後に、蛇足であるが、透析施設開設者の高齢化も始まっており、この点も「2025年問題」の背景として不安を感じる点である。

文 献

- 1) 大泉啓一郎：老いてゆくアジア 繁栄の構図が変わるとき。2007、95-99、中央公論新社、東京